事例報告

大学体育学　15,(2018),031-045

# 体育系大学のダンス授業におけるICT活用による ダンス映像視聴・評価活動の実践 —大学3・4年生を対象とした授業の分析を通じて—

栫ちか子[1)]，松元隆秀[1)]，佐藤　豊[2)]，金高宏文[3)]

# Practice of dance video viewing and evaluation activities by utilizing ICT in the dance class at the physical education university -Through the analysis of lessons for third and fourth graders-

Chikako KAKOI [1)], Takahide MATSUMOTO[1)],Yutaka SATO[2)]and Hirofumi KINTAKA[3)]

## Abstract

In the current curriculum guideline of junior high school, all exercise areas including dance are a compulsory subjects. Many students who major in physical education and wish to acquire a health and physical education teaching license are taking classes of dance in accordance with their own education curriculums. In teacher training college classes, to improve "practical leadership skills" is required. In the dance lesson, it is an essential not only to enhance dance performance skills but also to develop the ability evaluating them.

In the present study, we examined learning effects of dance video viewing and evaluation activities using ICT on performance skills and skills evaluation in the dance class of a physical education college. In the dance lesson, after shooting the dance with the iPad, the participants observed the movements of themselves while watching the images shot. Also, after the teacher uploaded the class video to an e-learning system, the participants looked back at the lesson by creating lesson notes. The current results indicated that 1) utilization of ICT in dance lessons was effective for improving performance skills, understanding of skills evaluation, and the reviewing the lesson using ICT contributed confirmation/utilization of guidance contents and fostering consensus-forming thinking. 2) Active-Learning in pairs and groups was effective for enhancing subjective attitude, cooperation and fair attitude.

キーワード：運動技能，技能評価，ダンス，ICT
Keywords：performance skill，skill evaluation，dance，ICT

## 1．緒　言

### 1-1. 教員養成を担う大学におけるダンス授業の課題

我が国の学校体育におけるダンス領域は，平成元年の学習指導要領の改訂において中学校と高等学校で男女共習となった（文部省，1989a，1989b）．平成10年の改訂では，新たに「リズムダンス」（小学校），「現代的なリズムのダンス」（中学校・高等学校）の内容が加わった（文部省，1999a，1999b，1999c）．さらに平成20年3月告示の学習指導要領（文部科学省，2008）では，中学校において保健体育の授業時間数が従前の90単位時間から105単位時間へと増加された．そして，生涯スポーツの観点より，より多くの領域の運動やスポーツを経験させることが望ましいことから，それまで選択とされていた「武道」「ダンス」が男女とも必修となった．そのため，保健体育科の教員養成を担う大学においては，ダンスの授業を充実させることが必須の課題となっている．

教員養成系の大学におけるダンス授業に関して，松本ほか（1994）は大学時に1年以上のダンス履修経験が学校現場での指導実践に有効であると述べている．筆者の研究においても，大学でダンス授業を受講していない現職教員は，「運動技能・表現技法等的確な助言ができない」と感じている割合が高く（栫・小松，2015），学校体育のダンス授業の実施に際し，教員自身のダンス授業の受講経験そのものが非常に重要であることが示唆されている．

日本教育大学協会（2004）は，教員に求められる資質能力の養成課程のカリキュラムの基軸を，「教育実践を科学的・研究的に省察（reflection）する力」とし，教員養成

1）鹿屋体育大学大学院　Graduate school, National Institute of Fitness and Sports in KANOYA
2）桐蔭横浜大学　Toin University of Yokohama
3）鹿屋体育大学　National Institute of Fitness and Sports in KANOYA

全体で「実践的指導力」を養成するという方向性を示している．さらに，中央教育審議会答申（文部科学省，2006）では，教員養成段階において，教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせることが必要であると指摘している．「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（文部科学省，2012）では，実践的指導力について，「新たな学びを展開できる実践的指導力 ( 基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため，知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習，協働的学び等をデザインできる指導力 )」と定義し，より具体的な育成すべき資質・能力が示されてきている．また，2015 年の教員養成等の改善に関する調査研究の「教員養成段階の到達目標」では，中等教育・保健体育の教員の資質・能力として「保健体育科の指導内容に関する系統的な知識・技能を持っている」「保健体育科の目標，内容，指導方法，評価についての知識・技能を持っている」ことが挙げられ，「指導方法」や「評価」に対しても教員養成段階で身に付けるべき知識・技能として位置づけられた．

以上のような背景を踏まえ，教員養成を担う大学の授業では，ダンスの実践的指導力を高めるための様々な取り組みが行われている．例えば木山（2014）は，これまでにダンスの経験がない学生に自己のダンス学習の知識・技能のみならず，ダンス指導における知識・技能を効率的に確然と使える技術として習得させるためには，学習内容の精錬が課題であるとし，学生による授業評価を基にした授業改善の課題を検討している．その結果によると，学習者としての学生に対する学習効果はおおむね実現できたが，指導者としての学習効果に対しては把握しきれず，指導する立場を意識させたうえでの学習場面の確保が課題であると指摘されている．また，宮本・中村（2015）は，学生自身の踊る・作る力をつけると同時にダンス指導者として必要な指導力を高める実習や理論を組み込んだダンス指導法授業を実施した結果，ダンスの重要性に対する認識が高まり，指導への自信も高まったと報告している．また同報告によると，今後の課題として，踊る力に加えダンス指導力の向上をより学生が感じられるような授業方法・カリキュラムの工夫が必要であると述べられている．

### 1-2. 体育系大学におけるダンスの「運動観察力」育成と ICT 活用

「実践的指導力」の養成には，示範等に必要なダンスの運動技能向上のみならず，動きを評価する力，すなわち技能評価力を育成することも重要である．教員が体育の授業を行う際は，学習指導要領に定められた「動き」を行う児童生徒を「観察」で評価する．その評価は，量的なものではなく，質的な高まりが重視される（余語，2011；栃木県教育委員会，2011a，2011b；福岡県体育研究所，2013）．特にダンス領域の中でも決められた動きがない，非定型的な「創作ダンス」や「現代的なリズムのダンス」（三浦，1984）においては，動きを観察し質的に評価する力が大変重要となる．また，「指導」と「評価」は一体であることから，動きを観察し評価する力を育成することで，ダンス学習の指導指針や学習課題が明確となり，指導方法の選択等にも必要な力を育成することができると考えられる．

この運動を「観察」する力については，Meinel（1981）が，「運動観察力は，音楽教師が音楽を聴き分けることとまったく同様に，体育教師にとって基本的な，中核的な能力である．何ひとつ聞き分けられない者は歌や楽器演奏などで他人を訓練することはできるものではない．何ひとつ見抜けない者は運動経過を修正することができない」と述べ，「多くの教師たちはまったく素人がするように，その注意をもっぱら結果に，運動の成果に向けてしまっている．そこでは達成に至る成り立ちは見落とされてしまっている」とも述べている．金子（1987）も運動観察力は単に指導者に要求される基本的能力であるばかりでなく，運動者自身の運動技能の向上にとっても大切な学習内容であると述べている．また，近年では，運動の技術レベルと運動観察能力との関連性（大島・山田, 2010）も明らかになっている．白石（1990）は, 小学校教員の体育指導において，指導している運動について，少なくとも観察ポイントを持ちながら，的確なフィードバック情報を子どもたちに与えてやれる程度の力が必要であると述べ，体育科教育における運動観察力の育成に関する視点を示している. これまで，教員養成課程において運動観察力の向上を目的としたアプローチは, 様々な方法で実施されている．佐藤（2001）は，教員志望学生に「指導者の観察ポイント」を身に付けさせる方法を探ることを目的とした実践方法を探り, 岸（2008）は，「教員の『見抜き』としての観察は，運動の修正指導にとって極めて重要であり，好ましい技能の獲得を保証するものである」とし，小学校教員養成課程において実践的指導力としての「運動観察力」の学習トレーニングを構想している．また，中村（2010）は，教員の介入を伴った器械運動の課外授業において，学生に教員との観察の仕方の違いに気づかせる工夫をしたところ，学生自身の運動観察の仕方について振り返る機会が保証され，運動観察能力を養成する実習の有効性を報告している．

ダンス授業においては，松本千代栄（1992）が，『ダンスの教育学』の中で，ダンス学習における発表と鑑賞について「自作，他作の発表の場は，自作のできばえを内観し

つつ実現し，他作には眼をひらき，心をひらいて作者の意図をうけとめる－いわゆる発現と享受の場である」と記す通り，ダンスの学習は,「踊る」「創る」だけではなく,「観る」の 3 つの体験を通して行われる．ダンス学習において動きを見せ合うことは，自他のグループの互いの違いや良さを認め合い，達成感が得られる体験であると考えられる．教員養成系大学のダンス授業においては,この「観る」活動を運動観察力の向上を目指し，動きの観察・評価観点を示す，指導教員の評価ポイントを伝える等することで，技能評価力や運動技能の向上が期待され，実践的指導力の高い教員を養成することができると考えられる．

一方, ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）は，主体的・協働的で深い学びを実現し（アクティブ），個々の児童生徒にとって最適化され（アダプティブ），様々な困難を抱える子ども達の学びを支援する（アシスティブ）など，様々な効果をもつツールとして，教育分野において ICT の積極的かつ適正な利活用が推奨されている（総務省，2017）．文部科学省では「教育の情報化に関する手引」（文部科学省，2010）,「教育の情報化ビジョン～ 21 世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」（文部科学省，2011),「教育の情報化加速化プラン～ ICT を活用した「次世代の学校・地域」の創生～」（文部科学省，2016）等を公表し，ICT 環境の整備，教員の ICT 活用指導力の向上，校務の ICT 化等について示している．小・中・高等学校の体育授業における ICT 活用については，デジタル教材やデジタル視聴等を活用して，模範となる示範動画を学習者に提示させる目的で使用するもの（賀川，2006；水島，2015）や，カメラやタブレットの動画機能，遅延再生装置等の動画フィードバック機能を活用した実践事例等が報告されている（秀島ほか，2013）．ダンス授業においても，デジタルコンテンツの開発（宮本ほか，2017）や盆踊りのデジタルコンテンツを用いた学習支援（松本ほか，2011），動画フィードバック機能を活用した中学校のリズムダンスの授業（松本，2017），中学校のフォークダンスの授業（沖本，2016）等の報告がある．

大学においても，近年，様々な分野において ICT を用いた授業が実践され，体育分野においても，Google Apps やスマートフォン，iPad 等の ICT 環境を活用した体育実技授業の実践（髙村，2016），タブレット端末や e-learning システム，アプリ等を授業や部活動で使用した事例（鹿屋体育大学，2014；鹿屋体育大学，2016；鹿屋体育大学，2017）等が報告されている．特に運動を観察するうえで，カメラやタブレットの動画機能，遅延再生装置等の利用は，自分や仲間の動きを，即時に何度も繰り返し見返すことやスロー・一時停止をして確認することでより詳細に観察できることから，ICT の活用は観察を通して技能評価力や運動技能の向上に有効であると考えられる．

体育授業における ICT 活用の効果については，これまでにいくつか報告（松坂，2014;岡本ら，2015;中野･田村，2017）されており，例えば松坂（2014）は，小学校教員養成における鉄棒運動の学習場面において，タブレット型 PC を活用したフィードバック学習をした結果，動きを分析する上でグループでの話合いが生まれ,動きが「できる」だけでなく「わかる」ことを課題とした活動が展開できたと述べている．また，岡本ほか（2015）は，保健体育科教育法の授業において器械運動のデジタル教科書を作成及び体操・器械運動のタブレット端末によるフィードバック学習を行ったところ,学習者が技能習得のつまずきを発見･修正し，技能が高まったと報告している．一方で否定的な知見もあり，中野・田村（2017）は，班別学習を基本としながら器械運動の授業において，ICT 機器を活用せずに教員の指導による授業形態と運動アプリ及び動画撮影等 ICT 機器を活用して教員の指導が最小限の授業形態の学習成果を比較した結果として，技能の自己評価及び運動技能評価に対して，有意な差は認められなかったと述べている．しかし，大学のダンス授業における ICT を活用したダンス映像視聴・評価活動の学習の可能性について言及した研究はない．ダンス授業では，通常，仲間同士で動きを「見せ合う」活動が行われる．その活動に加え，ICT を活用したフィードバック学習の導入は，仲間の動きのみならず自分の動きについても詳細な観察が可能になる. さらに，指導者が動きの観察・評価観点を示すうえで，何度も動きを繰り返し見返すことやスロー・一時停止等の機能が活用でき，技能評価力や運動技能の向上をより高めることが可能になると考えられる．

### 1-4. 大学教育におけるアクティブ・ラーニング

文部科学省中央教育審議会答申（2012）では，大学教育において能動的学修 ( アクティブ・ラーニング ) への転換が必要であると示された．アクティブ・ラーニングは，教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称である．具体的には，発見学習や問題解決学習，体験学習，調査学習，ディスカッション，ディベート，グループワークなどを指し，指導者が習得させたい内容を学修者自らが主体的に気付くようにする学習活動であり，山地（2014）は,「思考を活性化する学習形態」という言葉で表現している．アクティブ・ラーニングの一般的特徴として松下（2015）は，①学生は，授業を聴く以上の関わりをしていること，②情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置

かれていること，③学生は高次の思考（分析，総合，評価）に関わっていること，④学生は活動（例：読む，議論する，書く）に関与していること，⑤学生が自分自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること，及び⑥認知のプロセスの外化（問題解決のために知識を使ったり，人に話したり書いたり発表したりすること）を伴うことの6つを挙げている[注1)]．

ダンスの授業は，集団学習により，生徒自らが課題を発見し，解決に向け取り組む探求型の課題解決型学習を主体として，コミュニケーション能力の育成や，認め合う態度，論理的思考力を育むことができる（村田，2008；高橋，2008）．谷本（2016）はダンス授業における創作活動そのものが，自ら主体的に課題へ迫り，仲間とともに身体によるコミュニケーションを交わしながら問題発見・解決を繰り返す学習であるとし，アクティブ・ラーニングとして位置付けることが可能だと述べている．

従って，大学のダンス授業においては，ダンス授業の特性であるアクティブ・ラーニング型授業に加え，ダンスの「実践的指導力」を身につけさせることを目的として，ICT の活用を想定した場合に，授業をどのようにデザインしていくかが重要な課題になるといえる．ICT を活用したダンス映像視聴・評価活動を実践することは，運動技能の改善や技能評価について，学生自ら課題を発見し，修正・解決を図ることで深い学びが実現する可能性が期待できるのではないかと考える．さらこの課題解決型の学習をペアやグループ活動として行うことで，対話的な学びが生まれ，主体的に取り組む姿勢や，協調性などの態度の探究が生まれる可能性が考えられる．

そこで本研究では，体育系大学のダンスの授業において，ICT を活用したダンス映像視聴・評価活動を含む授業を行い，その実践と学習効果の可能性について検討することを目的とした．

## 2. 方　法

### 2-1. 対象授業及び調査対象者

体育系大学の 2015 年度前期に開講された実技科目「ダンス①」「ダンス③」を対象授業（全 16 回）とした．対象授業の受講生 66 名（男子：40 名，女子 26 名）を調査対象とした．

研究対象とした大学での「ダンス」の授業は，基礎的な実技力を身に付けるための関連実践科目の中の選択科目に位置づけられている．3 年次以降の学生が授業選択に関するオリエンテーションを受講後に選択履修する．なお受講生 66 名中 57 名（86.4%）が中学校・高等学校の教員免許取得希望者であった．

授業者は，指導教員 1 名（35 歳女性）と TA 1 名（27 歳男性）であった．指導教員は，舞踊教育学を専門とし，保育士養成校 3 年，大学教員 7 年のダンス授業の指導経験を持ち，中学校や高等学校においてもダンス授業指導の経験を有していた．TA は，博士課程後期 2 年次に在籍し，ダンス授業 TA 歴 3 年，大学学部生時代はダンス部に所属し全国大会入賞経験を有していた．

### 2-2. ダンス授業の授業計画

授業計画を作成する際には，単元構造図を活用した．単元構造図は，佐藤（2014）が 2006 年度頃からの国立教育政策研究センター指定校事業における中学・高等学校における各研究開発校において開発し，全国の指導主事や授業者と共に作り上げ修正を図ってきたものである．単元構造図は，単元における指導内容の確認，学習過程の具体化，評価規準の設定を一連の流れとして俯瞰的にとらえることができるという特徴をもつ．なお，筆者らは佐藤が開発した単元構造図を大学授業へ応用する初の試みとして，2013 年度及び 2014 年度に体育系大学の保健体育科教育法Ⅳの授業において，シラバスに基づく単元構造図を作成してきた（佐藤・栫，2015；佐藤・栫，2016）．本研究においても，シラバスに基づき指導内容，学習過程，評価規準を設定し，大学版の単元構造図を作成した（図 1）．

上記の単元構造図をもとに，授業開講前に TA の学生と打ち合わせを行った．指導内容，学習過程，評価規準の説明，さらに毎時間ごとの授業の準備物（保管場所や貸し出し方法を含む）や配布物，e-learning システム（WebClass）の活用方法について確認を行った．特に授業で使用するタブレット端末については，管理場所，管理方法，操作方法を確認し，機器トラブルの際の対処法についても実際のタブレットを用いてシミュレーションを行った．また毎授業前後に，30 分程度，授業の時間配分の確認や学生のペアリング・グルーピング，安全面を考慮したタブレット端末使用の際の置き場所の確保等について，TA とミーティングを行った．

### 2-3. 授業内での ICT 活用

(1) タブレット端末の利用

本授業では，「現代的なリズムのダンス」（4・5 回目）と「創作ダンス」（8 回目）の授業時に，タブレット端末（iPad）のカメラ機能を用いて動きを撮影し，撮影された映像を視聴しながら自身や仲間の動きについて省察を行った（図 1）．

「現代的なリズムのダンス」は，ペアで踊ったひとまとまりの動きをタブレット（iPad）にて撮影し，撮影された

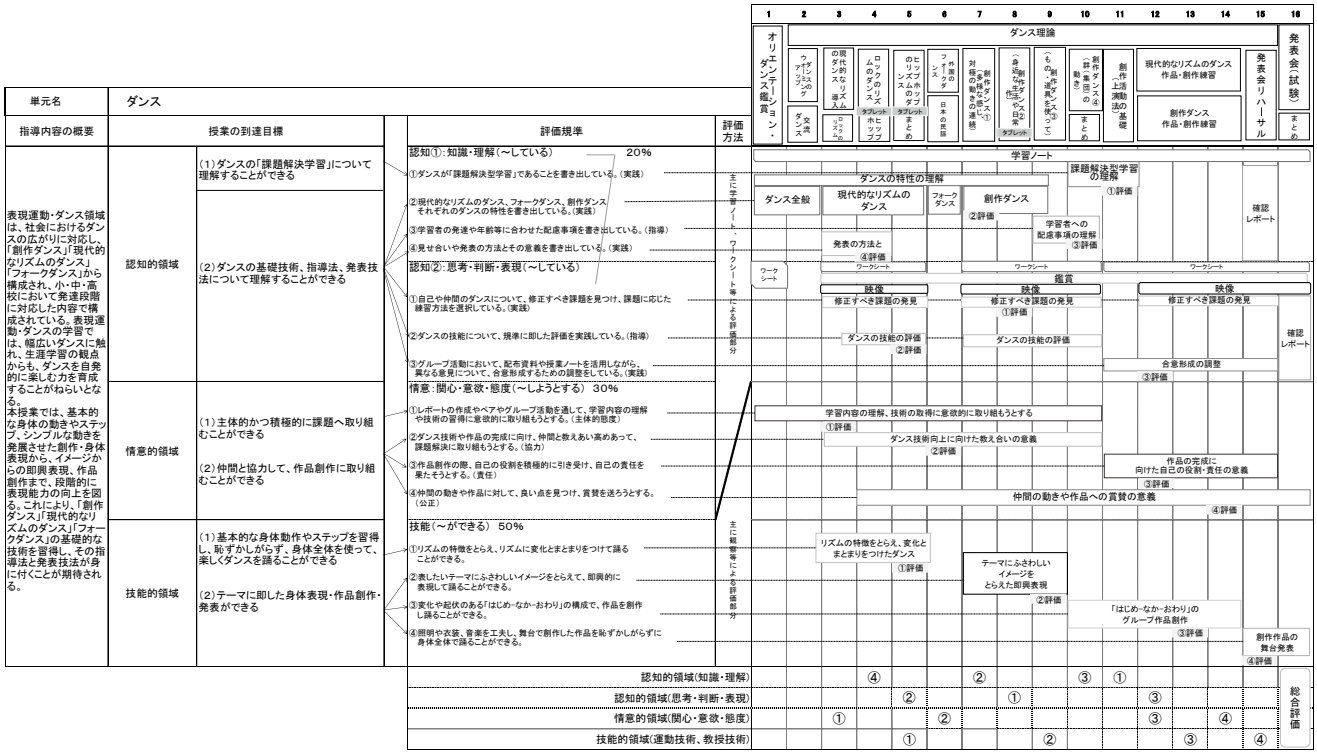



**図１　2015 年度「ダンス」授業　単元構造図**

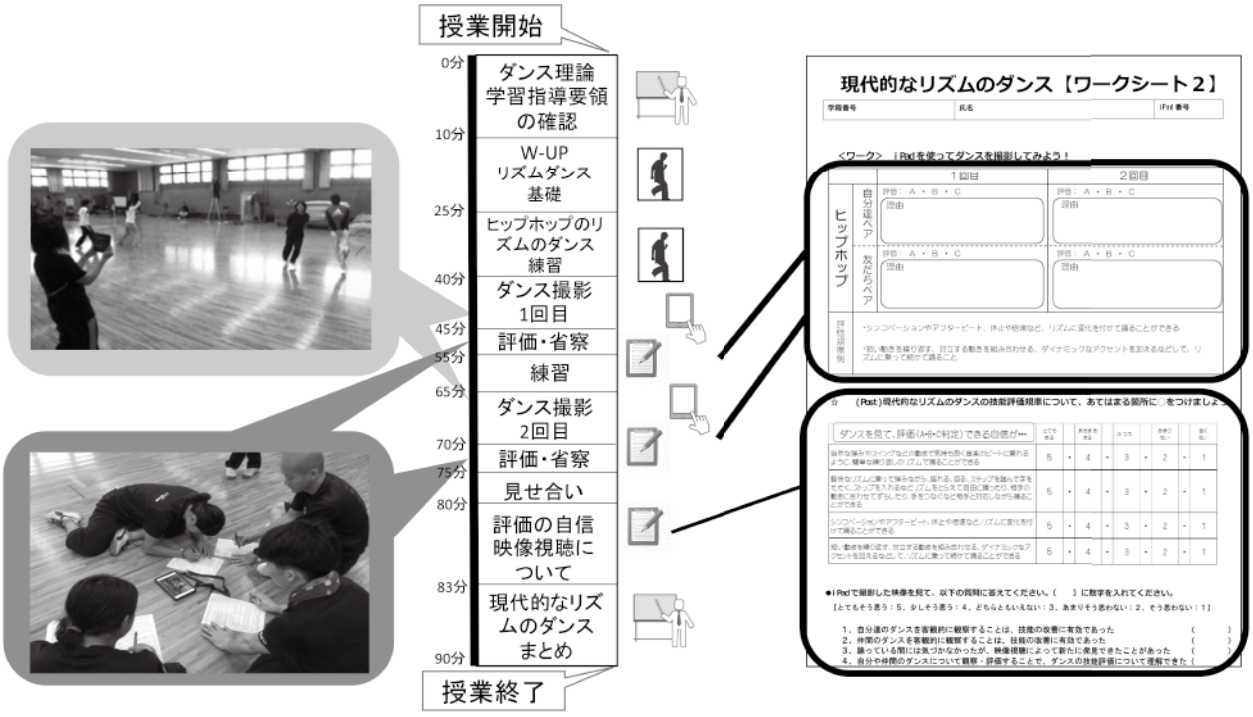



**図２　タブレット端末（iPad）を活用した取り組み例；５時間目の授業内容及びワークシート**

映像を視聴しながら自ペアの動きと他ペアの動きを評価させた（図 2）．その後，動きを修正・改善し，再度，撮影及び映像視聴による評価を行った．

「創作ダンス」では，ペアで踊ったひとまとまりの動きをタブレット（iPad）にて撮影し，撮影された映像を視聴しながら各自の動きについて振り返りを行った．しかしながら，授業時間の関係上，「創作ダンス」では，２回目の撮影及び映像視聴による評価活動は行わず，１回のみの撮影，視聴・評価活動となった．

なお，授業内の「見せ合い」の活動は，タブレット端末を利用しない授業時間内で毎回行った．

(2) e-learning システム（WebClass）の活用及び授業ノー

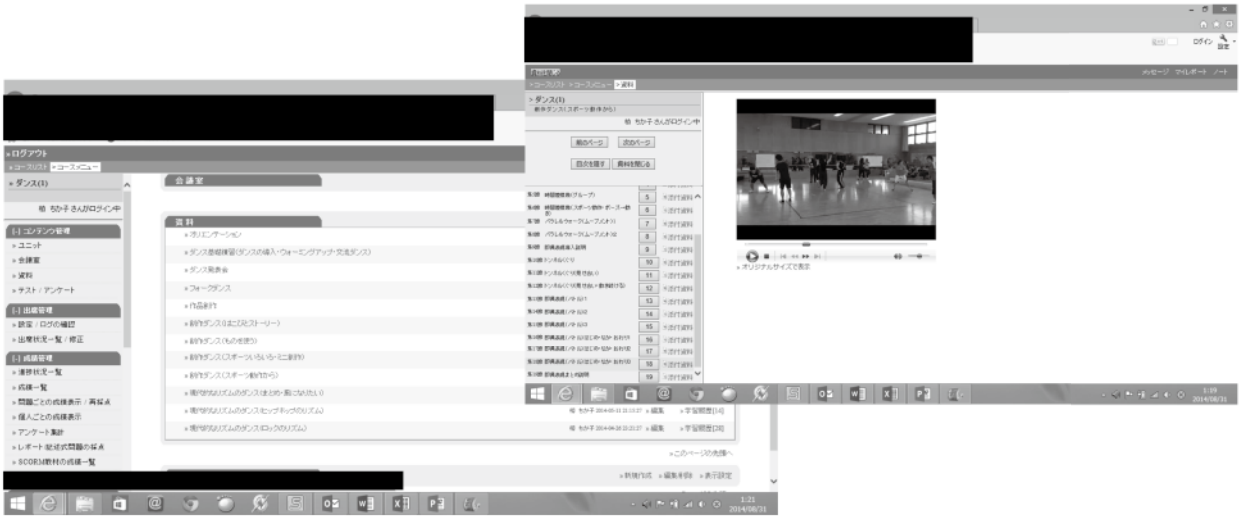


**図３　学内 e-learning システム（WebClass）上の授業映像ページの例**

トの作成

講義や演習等の科目では，教科書やノート等，授業終了後に，学んだ内容を振り返るための手段が多くある．しかし，実技の授業においては，実施された内容について記録を残すことは困難である．実技授業受講時にはできていた動きや学習した練習方法・指導方法等も，授業が終了し，一定の期間が空いてしまえば，学んだ内容を忘れてしまいやすい．また，その際に振り返る手段がないケースも多い．そこで,「ダンス」の授業では, 授業の様子をタブレット（iPad) で撮影し，授業映像を学内の e-learning システム（WebClass）で視聴できるようにした上で，授業ノートの作成を試みた．

なお，視聴映像と授業ノートは以下の手順で作成した．まず，毎週の授業の様子をタブレット（iPad）で撮影し，授業後に映像を PC に取り込む．Movie Maker を用いて，90 分の授業を授業内容に合わせ，約 5 分程度に分割する．分割した映像を WebClass 上にアップし，受講生が全員視聴できる状態をつくる（図 3）．授業ノートは，受講生が毎週 2 ～ 3 名ずつ当番制にて，授業時間外に映像を視聴しながら作成し，翌週の授業までに教員へ提出することとした．授業ノートは，イラストを使って実技の内容を記載したり，実施上のポイントや指導の際の注意点等をまとめるよう指示をした．教員は提出されたノートを受講生全員分の枚数印刷し，授業時に配布する．この作業を繰り返すことで，全 16 回の授業終了時には，受講生全員が全 16 回分の授業ノートを手にすることができる．受講生には配布されたノートをすべてファイリングして保存し，教育実習時や卒業後の指導時等, 振り返りに活用するよう促した．

## 2-4. 調査方法及び分析

ICT を活用したダンス映像視聴・評価活動の学習効果を明らかにするために，学習過程（図 4）の中で以下の調査を実施した．

①映像視聴・評価活動の理解度や有効性に関する調査

「現代的なリズムのダンス（5 回目)」「創作ダンス（8 回目)」の授業の最後に，映像視聴・評価活動の理解度や有効性について，先行研究（賀川・梶，2013，髙橋・田中，2014）を参考に以下の 4 項目を作成し，アンケートを実施した．調査では「とてもそう思う」～「そう思わない」の 5 件法を用いて行い，各調査項目の平均値及び標準偏差を求めた．

Q1.「自分や仲間のダンスについて観察・評価することで，ダンスの技能評価について理解できた」

Q2.「踊っている間には気づかなかったが, 映像視聴によって新たに発見できたことがあった」

Q3.「仲間のダンスを客観的に観察することは，技能の改善に有効であった」

Q4.「自分達のダンスを客観的に観察することは，技能の改善に有効であった」

②現代的なリズムのダンスを評価する自信」に関する調査

「現代的なリズムのダンス」について，中学校学習指導要領解説（2008）の中学校第 1 学年及び第 2 学年「リズムと動きの例示」の以下の項目について「評価できる自信」を，授業前後（3 回目授業の最初・5 回目授業の終わり）で比較した．調査は「評価する自信」が「とてもある」～「全くない」の 5 件法を用いて行い，各調査項目の平均値及び標準偏差を求めた．各項目の比較は，対応のある t 検定にて行った．

Q1.「自然な弾みやスイング等の動きで気持ち良く音楽のビートに乗れるように，簡単な繰り返しのリズムで踊ることができる」を評価できる自信

Q2.「軽快なリズムに乗って弾みながら，揺れる，回る，

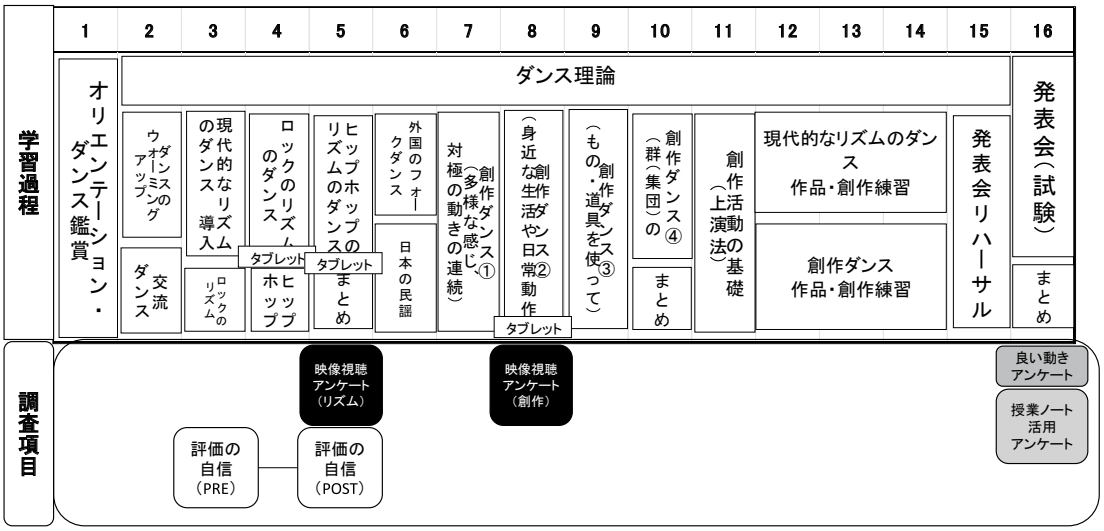



**図４　学習過程と調査項目の関係**

ステップを踏んで手をたたく，ストップを入れる等リズムをとらえて自由に踊ったり，相手の動きに合わせてずらしたり，手をつなぐ等相手と対応しながら踊ることができる」を評価できる自信

Q3.「シンコペーションやアフタービート，休止や倍速等，リズムに変化を付けて踊ることができる」を評価できる自信

Q4.「短い動きを繰り返す，対立する動きを組み合わせる，ダイナミックなアクセントを加える等して，リズムに乗って続けて踊ることができる」を評価できる自信

③ダンスの「良い」動きの理解及び授業ノートの活用に関する調査

16 回目の授業の最後に，ダンスの「良い」動きの理解及び授業ノートの活用について，以下の内容についてアンケートを実施した．調査では「とてもそう思う」～「そう思わない」の５件法を用いて行い，各調査項目の平均値及び標準偏差を求めた．

Q1.「ダンスの『良い』動きがわかるようになりましたか」

Q2.「授業ノートについて，今後，指導内容の確認に役立ちそうですか」

Q3.「授業ノートについて，今後，教育実習や採用試験，教育現場に出てから活用できそうですか」

なお，学生には授業内で調査に関する本研究のアンケートの内容が授業評価（成績）には反映されないことを説明した．そして，結果のみを論文や報告書等で公表することがあることを前提に，口頭・書面にて調査研究・映像取扱いの了承を得られた学生に関して，アンケート結果を採用した．

## 2-5. 授業者の評価について

授業者は「認知的領域」「情意的領域」及び「技能的領域」の各項目について，A・B・C の３段階で評価を行った．「認知的領域」の「知識・理解」「思考・判断・表現」については，学習ノート，ワークシートの記載から「形成的評価」を実施し，最終的な「総括的評価」は，「確認レポート」にて行った．「情意的領域」,「技能的領域」については，授業者による観察評価で「形成的評価」を実施し，「総括的評価」は「ダンス発表会」のへの取り組みで判断した．A・B・C 評価ついては，表 1.2 に示した判定基準に即して行った．評価規準毎に A・B・C 評価の人数の割合を算出し，評価規準毎の学生の到達状況を把握した．

認知的領域：思考・判断・表現の「②ダンスの技能について，規準に即した評価を実施している（指導）」についての判断基準に関しては，授業内で，ダンスの動きに関して，学習指導要領の解説例示をもとに，以下の観点をもとに評価するように指導した．

①４時間目：ロックのリズムのダンス

・自然な弾みやスイング等の動きで気持ち良く音楽のビートに乗れるように，簡単な繰り返しのリズムで踊ることができる

・軽快なリズムに乗って弾みながら，揺れる，回る，ステップを踏んで手をたたく，ストップを入れる等リズムをとらえて自由に踊ったり，相手の動きに合わせてずらしたり，手をつなぐ等相手と対応しながら踊ることができる

②５時間目：ヒップホップのリズムのダンス

・シンコペーションやアフタービート，休止や倍速等，リズムに変化を付けて踊ることができる

・短い動きを繰り返す，対立する動きを組み合わせる，ダイナミックなアクセントを加える等して，リズムに乗って続けて踊ることができる

③８時間目：創作ダンス

・一番表したい場面や動きをスローモーションの動きで誇張したり，何回も繰り返したりして表現することができる

また，授業全体を通してダンスの「良い」動きは，「恥ずかしがらず全身を使って全力で行う動き」であることを繰り返し指導し，また，創作ダンス・現代的なリズムの非定型のダンスに共通するの「4つのくずし」（「空間（場）のくずし」「体のくずし」「リズムのくずし」「人間関係のくずし」）（村田，2011；村田2012）を入れて，よりメリハリのあるダイナミックな表現を行うよう指導した．映像視聴・評価活動の際，これらの観点を具体的に示しながら評価を行っていれば，思考・判断・表現②の授業者の評価はAとした．

また，技能的領域：技能の「①リズムの特徴をとらえ，リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる」「②表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて，即興的に表現して踊ることができる」の評価に関しても，①は「リズム」②は「イメージ」をもとに，ダンスの「良い」動きを身体で表現できているかで授業者は評価を行った．

なお，本研究では，映像視聴によって学生自身が行った映像の技能評価そのもの（A・B・C評価）を，授業の技能的領域の評価（成績）には反映させなかった．

## 3. 結　果

### 3-1. 受講生による授業に関する評価結果

（1）タブレット端末（iPad）によるダンス映像視聴・評価活動の理解度と有効性（図5）

「現代的なリズムのダンス」「創作ダンス」ともに以下の4項目は，5段階評価で平均4.5ポイント以上の高評価となった．

・「観察・評価することでダンスの技能評価について理解できた」
・「映像視聴による新たな発見があった」
・「仲間のダンスの観察は技能の改善に有効」
・「自分達のダンスの観察は技能の改善に有効」

（2）「現代的なリズムのダンス」の映像視聴・評価活動を行うことによる現代的なリズムのダンス評価に対する自信の変化（図6）

「現代的なリズムのダンス」の授業前後（3回目授業の最初・5回目授業の終わり）でダンス評価に対する自信を比較したところ，いずれの項目においても，授業後に評価に対する自信が「自信がない」から「自信がある」へと向上（$p < 0.001$）した．

（3）授業全体を通しての「良い動き」の理解（図7）

ダンスの「良い」動きの理解については，5段階評価で4.7 ± 0.4ポイントの高評価であった．

（4）授業ノートの活用（図8）

16回目の授業後のアンケートでは，「授業ノートについて，今後，指導内容の確認に役立ちそうですか？」が4.8 ± 0.6ポイント，「授業ノートについて，今後，教育実習や採用試験，教育現場に出てから活用できそうですか？」が4.8 ± 0.5ポイントと，いずれの項目も5段階評価で平均4.8ポイント以上の高評価となった．

### 3-2. 授業者による授業に関する評価

（1）授業者の評価について

評価は授業担当の指導教員が行い，判定基準に従いA・

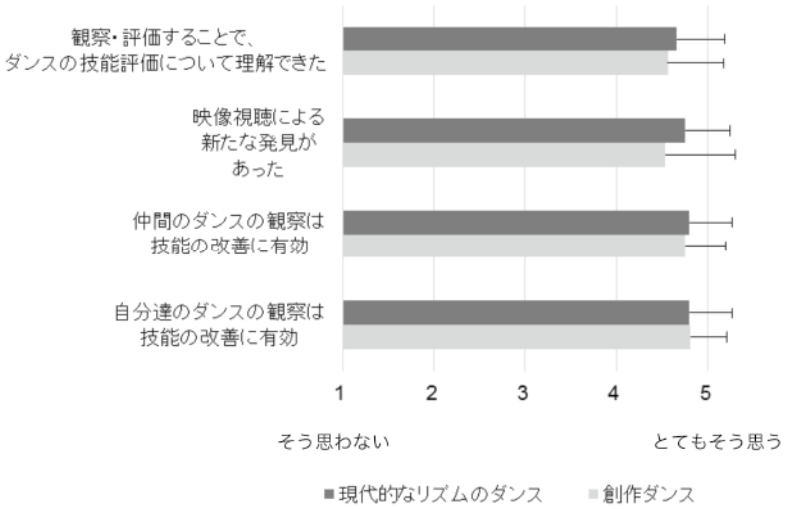



**図5　タブレット端末（iPad）によるダンス映像視聴・評価活動の感想**

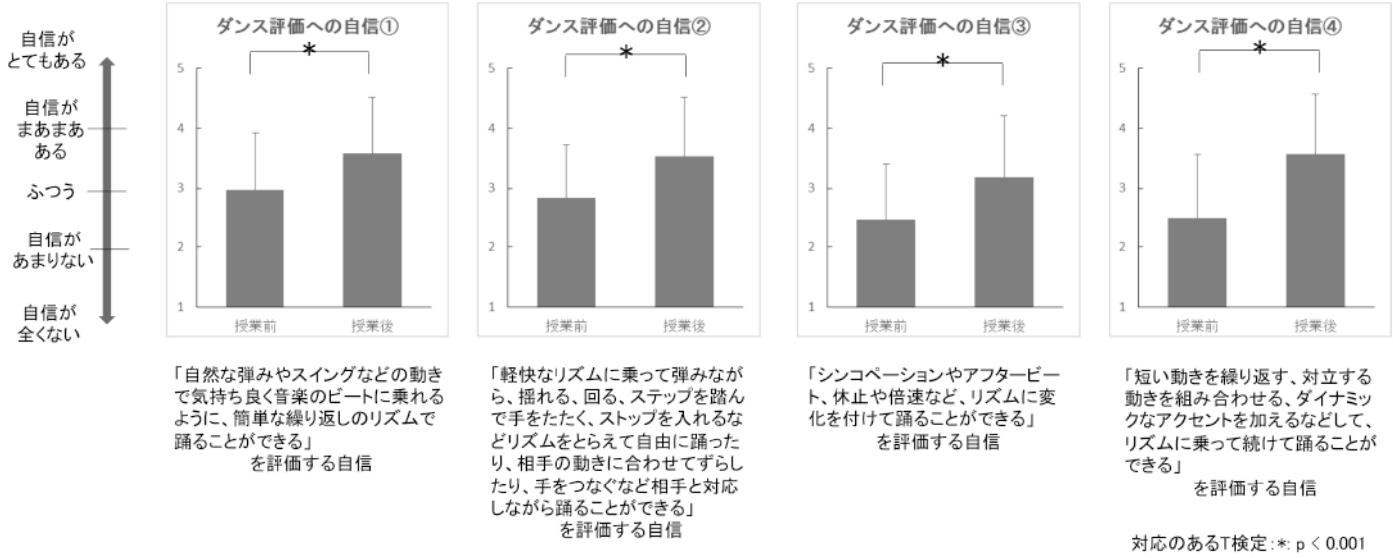



**図６　「現代的なリズムのダンス」の映像視聴・評価活動を行うことによる現代的なリズムのダンス評価に対する自信の変化**

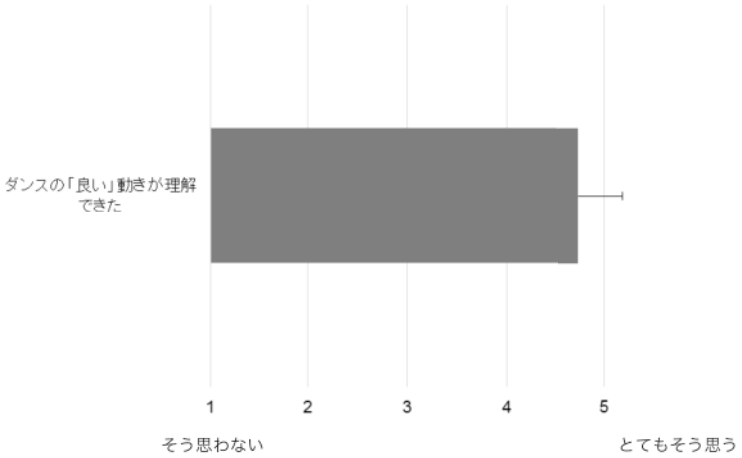



**図７　授業全体を通しての「良い動き」の理解についての自己評価**

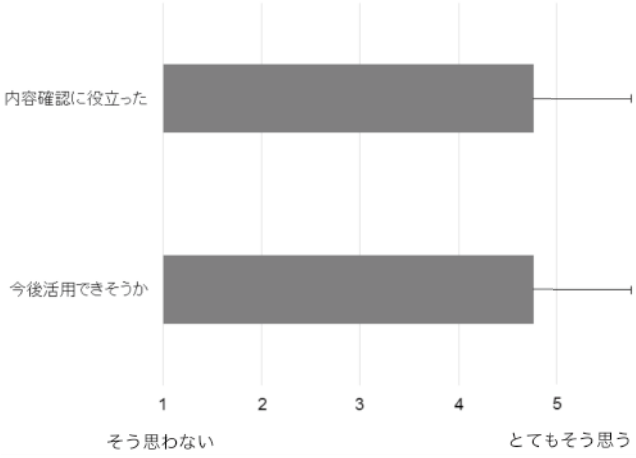



**図８　授業ノートの活用についての感想**

B･Cの3段階で,評価規準毎に人数の割合を算出した.表1,2に評価規準毎の学生の到達状況を示した．その結果，主に学習ノートやワークシート等による評価を行った「認知的領域」において，ダンスの「課題解決型学習」「課題に応じた練習方法の選択」「合意形成ための調整」について，一部C評価の学生が見られた.しかし,「ダンスの特性」,「発表方法と意義」,「発育発達に応じた指導上の配慮事項」,「規準に即した技能評価」については,C評価の学生はおらず,全員がB以上と一定の理解は得られていた．特に,「ダンスの特性（92.4%）」,「規準に即した技能評価（78.8%）」,「発育発達に応じた指導上の配慮事項（77.3%）」はA評価の割合が高く理解度が高かった.

また,主に観察により評価した「情意的領域」については,特に「主体的態度」「協力」「公正」ではA評価が70%以上で,「責任」を合わせた4観点共にC評価の学生はいなかった.

「技能的領域」では，一部C評価で達成度が不十分な学生がいたものの，ほとんどの学生については，一定の技能の習得が認められた.「舞台発表」の項目では8割を超える学生がA評価となり,「現代的なリズムのダンス」における項目では,63.6%の学生がA評価となった.しかし,「創作ダンス」における「即興表現」や「作品創作」については，A評価の学生が47.0%，45.4%と半数以下であった.

## 4. 考　察

本研究では，体育系大学のダンスの授業において，ICTを活用したダンス映像視聴・評価活動を含む授業実践を行い，その実践と学習効果の可能性について検討することを目的とした.

**表１　認知的領域の評価規準毎の判定基準と受講生の評価割合（主に学習ノート・ワークシート・確認レポートによる評価）**

| | | | 判定基準 | | | 評価割合（%） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | A | B | C | A | B | C |
| 認知的領域 | 知識・理解 | ①現代的なリズムのダンス、フォークダンス、創作ダンス それぞれのダンスの特性を書き出している(実践) | それぞれのダンスについて、具体例を挙げながら特性を記載している | それぞれのダンスについて学習した内容を記載している | それぞれのダンスについて学習した内容を記載していない | 92.4 | 7.6 | 0.0 |
| | | ②ダンスが「課題解決型学習」であることを書き出している（実践） | 具体例を挙げながら、学習した「課題解決型学習」について記載している | 学習した「課題解決型学習」について記載している | 「課題解決型学習」について学習内容を記載していない | 60.6 | 33.3 | 6.1 |
| | | ③見せ合いや発表の方法とその意義を書き出している（実践） | 見せ合いや発表の仕方について、学習したすべての具体例を挙げながら、その意義について記載している | 見せ合いや発表の仕方について、具体例を挙げながら、その意義について記載している | 見せ合いや発表の仕方について、具体例や意義を記載していない | 62.1 | 37.9 | 0.0 |
| | | ④学習者の発達や年齢等に合わせた配慮事項を書き出している（指導） | 学習したすべての配慮事項について具体例を挙げながら、記載している | 学習した配慮事項について記載している | 学習した配慮事項について記載していない | 77.3 | 22.7 | 0.0 |
| | 思考・判断・表現 | ①自己や仲間のダンスについて、修正すべき課題を見つけ、課題に応じた練習方法を選択している(実践) | 自己や仲間のダンスの課題について、具体的かつ的確に指摘し、適切な練習方法を選択している | 自己や仲間のダンスの課題について指摘し、適切な練習方法を選択している | 自己や仲間のダンスの課題を発見できず、課題をもって練習できていない | 69.7 | 27.3 | 3.0 |
| | | ②ダンスの技能について、規準に即した評価を実践している(指導) | 技能評価規準に即して、具体的な評価観点を示しながら、評価を実践している | 技能評価規準に即して、評価を実践している | 技能評価規準に即した評価ができていない | 78.8 | 21.2 | 0.0 |
| | | ③グループ活動において、配布資料や授業ノートを活用しながら、異なる意見について、合意形成するための調整をしている(実践) | 資料やノートを活用しながら、改善点やその根拠を挙げるなどして、具体的方策を見つけて、グループ間の意見を調整している | 資料やノートを活用しながら、グループ間の意見を調整している | 資料やノートを活用しながら、グループ間の意見を調整できていない | 47.0 | 50.0 | 3.0 |

75%以上　50～75%　50%以下

## 4-1. タブレット端末（iPad）によるダンス映像視聴・評価活動の効果

①「技能的領域」について

「現代的なリズムのダンス」「創作ダンス」共に，タブレット端末（iPad）を使用した映像視聴・評価を通して，学生自身が「技能の改善」の有効性を感じていた（図5）．この結果は，「ダンス」授業の「現代的なリズムのダンス」を対象とした先行研究（栫，2014）において報告されているものと同様のものであった．しかし，先行研究では，「現代的なリズムのダンス」における学生自身の「技能の改善」に対する実感についての調査のみで，授業者の「技能」評価については検証していなかった．そこで本研究では，「現代的なリズムのダンス」及び「創作ダンス」において，授業者が行った「技能的領域」の評価についても検証し，その結果から以下のような点が明らかになった．

授業者が行った「技能的領域」の評価項目では，2回にわたり映像視聴・評価を行った「現代的なリズムのダンス」の「リズムの特徴をとらえ，リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる」の項目で6割を超える学生がA評価となった．しかし，1回のみ映像視聴・評価を行った「創作ダンス」の「表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて，即興的に表現して踊ることができる」の項目で，A・B評価が47%ずつであった．このことは，映像視聴・評価の活動を複数回設け，学生が自分自身の動きを客観的に分析する機会を多くすることで，技能課題が明確になり，学生の「技能の改善」が促された可能性を示唆するものであった．特に創作ダンスの即興表現においては，日常生活の中で，またメディアを通してもダンスを目にする機会がなく，教えるべき内容を想像しにくい教員も多い（寺山，2004）．学生も創作ダンスの「良い」動きを想像しにくかった状況であった可能性が高い．イメージをもとにした即興表現は，個人個人が捉えたイメージを動きにするため，それぞれ異なる動きが出現する．しかしながら，寺山・細川（2011）は，ダンス授業の熟練実践者4名の教諭の即興表現でおさえるべき技能の共通点として，「動きの極限化」，「動きの多様化[注2)]」「メリハリのある対極の動き」であるとし，「良い動き」の見解に共通性があると述べている．これは，授業全体を通して授業者が指導したダンスの「良い」動きと共通する．また，イメージをとらえた動き，つまり「動きの質感」は，山崎ほか（2014）の報告の中でも「動きをみる観点」の一つであり，創作ダンスを行ううえで大きなポイントとなる．創作ダンスには正解の動きがあるわけではない．しかし，どのような動きにも共通する「良い」動きは，様々な動きの観察を繰り返すことで，Meinelが指摘する他者観察の自己観察化，つまり観察している対象の動きを自らの想像力によって観察者自身の自己運動とし

**表２　情意的・技能的領域の評価規準毎の判定基準と受講生の評価割合（主に授業者の観察による評価）**

| | | | 判定基準 | | | 評価割合 %) | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | A | B | C | A | B | C |
| 情意的領域 | 関心 ･意欲 ･態度 | ①レポートの作成やペアやグループ活動を通して、学習内容の理解や技術の習得に意欲的に取り組もうとする 主体的態度） | 学習内容の理解や技術の習得に、単元を通して、自ら進んで取り組んだり、集中して取り組んだりしようとしている | 学習内容の理解や技術の習得に、意欲的に取り組もうとしている | 学習内容の理解や技術の習得に、意欲的に取り組む態度が見られない | 77.3 | 22.7 | 0.0 |
| | | ②ダンス技術や作品の完成に向け、仲間と教えあい高めあって、課題解決に取り組もうとする 協力） | 指示 された教え合いの場に留まらず単元を通して、仲間と教え合い高めあって、課題解決に取り組もうとしている | 指示された教え合いの場で、仲間と教え合い高めあって、課題解決に取り組もうとしている | 指示された教え合いの場で、仲間と教え合い高めあって、課題解決に取り組む態度が見られない | 74.2 | 25.8 | 0.0 |
| | | ③作品創作の際、自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとする 責任） | 作品創作活動全体を通して、自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとしている | 自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとしている | 自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとする態度が見られない | 37.9 | 62.1 | 0.0 |
| | | ④仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、賞賛を送ろうとする 公正） | 指示 された場面に留まらず単元を通して、仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、賞賛を送ろうとしている | 指示された場面において、仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、賞賛を送ろうとしている | 指示された場面において、仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、賞賛を送ろうとする態度が見られない | 80.3 | 19.7 | 0.0 |
| 技能的領域 | 技能 | ①リズムの特徴をとらえ、リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる | ロックやヒップホップ等のリズムの特徴をとらえて、リズムに変化とまとまりをつけてスムーズに踊り続けることができる | ロックやヒップホップ等のリズムの特徴をとらえて、リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる | ロックやヒップホップ等のリズムの特徴をとらえて、リズムに変化とまとまりをつけて踊れていない | 63.6 | 30.3 | 6.1 |
| | | ②表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができる | 表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現し感じを込めて踊り続けることができる | 表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができる | 表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができない | 47.0 | 47.0 | 6.1 |
| | | ③変化や起伏のある「はじめ-なか-おわり」の構成で、作品を創作し踊ることができる | 変化や起伏のある「はじめ-なか-おわり」の構成で、作品を創作し感じを込めて踊ることができる | 変化や起伏のある「はじめ-なか-おわり」の構成で、作品を創作し踊ることができる | 変化や起伏のある「はじめ-なか-おわり」の構成で、作品を創作し踊ることができない | 45.4 | 48.5 | 6.1 |
| | | ④照明や衣装、音楽を工夫し、舞台で創作した作品を恥ずかしがらずに身体全体で踊ることができる | 照明や衣装、音楽を工夫し、舞台で創作した作品を恥ずかしがらずに身体全体で感じを込めて踊ることができる | 照明や衣装、音楽を工夫し、舞台で創作した作品を恥ずかしがらずに身体全体で踊ることができる | 照明や衣装、音楽を工夫し、舞台で創作した作品を恥ずかしがらずに身体全体で踊ることができない | 80.3 | 19.7 | 0.0 |

75%以上　50～75%　50%以下

てとらえることができるようになることを期待できると考えられる．今後の授業設計の際には，「創作ダンス」の授業においても，さらなるダンスの技能改善を目指し，映像視聴・評価活動，また「観る」活動の機会を増やす必要があると考えられる．

②「認知的領域」について

授業者が行った「認知的領域」の評価では，「思考・判断・表現：ダンスの技能について，規準に即した評価を実践している．（指導）」の項目においては，全員がＢ評価以上と一定の基準はクリアしていた．一方，受講学生は，「現代的なリズムのダンス」「創作ダンス」共に，タブレット端末（iPad）を使用した映像視聴・評価を通して，「技能評価について理解できた」と感じていた（図5）．また，「現代的なリズムのダンス」においては，映像視聴・評価を行うことで，学習指導要領に示された例示の項目を評価する「自信」が向上していた（図6）．さらに，授業全体を通して，ダンスの「良い」動きについて，理解が深まったと実感していた（図7）．これらは，映像視聴・評価の活動を通して，学生自身が「技能評価の理解」「評価の自信」について実感したことを示唆する．大庭（2000）は，毎時間の小さな見せ合いの中から，他のグループを受容かつ感心し，また，自身の出来ばえを確認し，自信を深め，反省しながら試行錯誤を繰り返し，観ることによって評価の基準が出来上がっていくと述べている．松本富子(1992)は，ダンスの学習の過程では，「踊る」と「観る」は「評価」の働きを合わせもつとし，片岡（1997）は，視覚情報を用いる「観察学習」や「視覚イメージ学習」の有効性を報告している．本研究の結果からも，タブレット端末（iPad）を利用してダンスの動きを観察・鑑賞することは，運動観察力を高め，運動技能や技能評価力の向上に貢献しうることを示すものといえる．

③「態度的領域」について

本授業では，ダンス授業の特性であるアクティブ・ラーニング型授業に加え，授業の前半からタブレット端末活用を通したペア及びグループにおける課題解決型学習を積極的に取り入れ，授業内容を振り返るための授業ノート作成も授業全体を通して行った．その結果，どの学生も積極的に活動に取り組む姿が観察でき，授業者が行った「情意的領域」の評価において，「レポートの作成やペアやグループ活動を通して，学習内容の理解や技術の習得に意欲的に取り組もうとする．（主体的態度）」と「ダンス技術や作品の完成に向け，仲間と教え合い高めあって，課題解決に取

り組もうとする．（協力）」，「仲間の動きや作品に対して，良い点を見つけ，賞賛を送ろうとする（公正）」の項目は，いずれもＡ評価が70%以上となり，Ｃ評価の学生はいなかった．本授業でのダンス映像視聴・評価活動では，指導者が動きの観察のポイントを示すことで，運動技能の改善や技能評価についての多くの対話が生まれた．その背景として，指導者が一方的に動きや振りを教授するのではなく，学生自らが課題を発見し，協力しながら修正・解決を図る課題解決型学習を授業前半から取り入れることで，意欲的に仲間と協力しながら活動する態度が養われ，授業後半の作品創作時においてもその姿勢が生かされた可能性がある．また動きを修正することや作品をよりよくするためのディスカッションは，良い点を見つけ，賞賛を送ろうとする公正的態度の育成に貢献し，さらに授業ノートの作成は，学生全員に配布されるため，自分以外の学生にも理解しやすいよう授業のポイントをまとめたり工夫したりすることで学習意欲の向上につながっている可能性が考えられる．

## 4-2. e-learning システム（WebClass）を活用した授業ノートの効果

学内の e-learning システム（WebClass）にアップした授業映像を視聴しながら学生が作成した授業ノートは，授業で行った内容を整理して，人の動きやポジション，隊形等絵や記号で示すと共に，実技や指導，評価する際のポイント等をわかりやすく記載することを求めた．その結果，授業者も予想しなかった，学生各自で個性的な工夫が認められた（資料1）．例えば，ポーズや動きについて学生自身の言葉で説明されている，複雑な手や足の動きの部分は拡大したイラストで示す等が認められた．

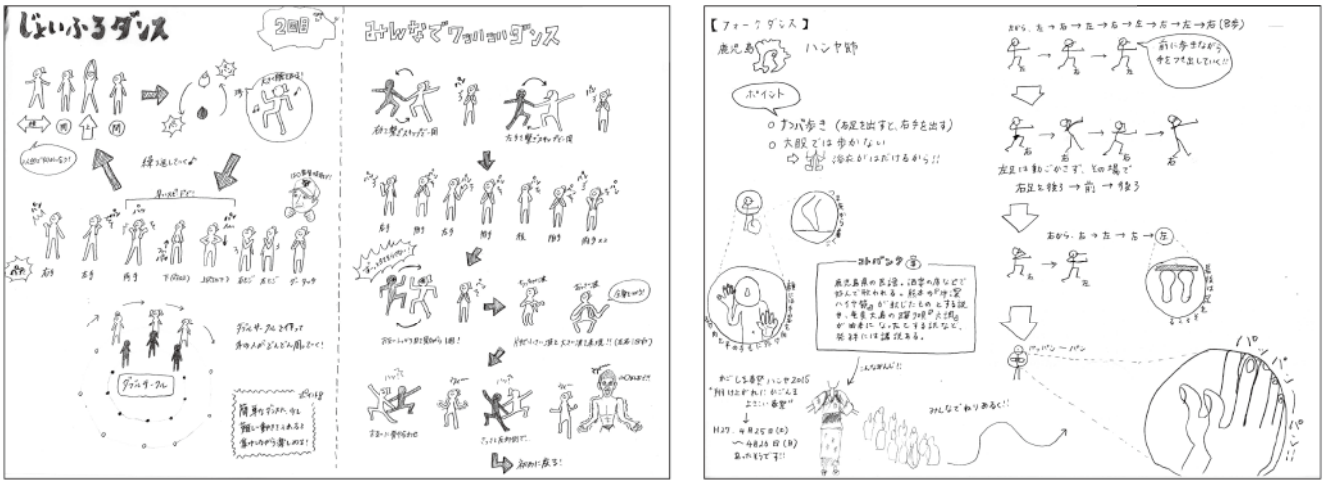
授業者が行った「認知的領域」の「思考・判断・表現：グループ活動において，配布資料や授業ノートを活用しながら，異なる意見について，合意形成するための調整をしている．（実践）」の評価項目において，ほぼ全員がＢ評価以上で，授業内で授業ノートを活用している様子が認められた．また，今後の活用についても，「指導内容の確認に役立ちそう」「今後も活用できそうである」と学生は肯定的に捉えていた（図8）．実際に，視聴回数は2017年3月末現在で授業全体を通して815回と，多くの受講生が視聴していた．受講生からは，「模擬授業を行う授業で参考にした」「教育実習時に活用できた」「授業ノートと WebClass の映像がどちらもあるので確認に便利」等の声も聞かれた．受講生が一度体験・実践した授業内容の記録は，授業終了後に振り返る際にも，市販されている実技の指導書等に比べ理解が早く，運動技能や評価の際のポイントの確認にも有効に働いている可能性が示唆された．

## 4-3. 今後の課題

以上より，ICT を活用したダンス映像視聴・評価活動を含む授業実践は，運動技能の改善や技能評価の理解に有効である可能性が示唆された．さらにペアやグループでの課題解決型学習を積極的に取り入れることが，主体的態度や協力・公正的姿勢を育むうえで重要であり，ICT を活用しての授業の振り返りは，授業内及び授業終了後においての指導内容の確認・活用，合意形成的思考の育成に貢献しうる可能性が示唆された．

しかし，学生自身が実際にダンスを指導する際には，より良い動きに改善させるため，動きの詳細な評価の観点をとらえた指摘を行う必要があり，このような発展的な技能評価力の獲得についてはまだ十分とは言えない．

そもそもダンスの技能評価については課題が多い．「現代的なリズムのダンス」と「創作ダンス」は，「リズム」や「イメージ」をもとにした「自由」なダンスであり（村




資料１　学生が作成した授業ノートの例

田，2009)，創意・工夫によって型にはまらない「非定型」に相当する（三浦，1984）．これらのダンスは，他の球技や水泳，陸上競技等の領域とは異なり，得点や記録等の客観的尺度を適用しにくい（寺山，2004）．学習者の創作を妨げないために，運動が規定されていないのは理解できるが，「どのような動きをしたらよいのか」「どのような動きが良い動きなのか」は判然としない（寺山，2005）．また，生徒の自由な発想や動きを引き出し表現するという特性から，「評価の仕方」が難しい（宮本，2005）．以上のような背景を踏まえ，ダンス授業の評価については，評価規準作成の試みも含め，これまでにも数多く検討されてきた．しかし，ダンスの動きを観る観点が統一されておらず，技能評価体系は非常に曖昧なものになっている．学校体育におけるダンスの評価の観点の明確化は，「良い動き」「良い作品」等の観点，ダンス学習における指導の指針や学習者の学習課題の明確化につながる可能性が高い．大学のダンス授業において「技能評価力」の向上を目指すためにも，ダンスの技能評価体系について整理することは非常に重要であり，今後の課題であると言える．

一方，本研究を通して，授業でICT活用を行ううえでの注意点・課題点も浮かび上がった．タブレット端末を活用した授業では，ダンス実技の時間短縮防止のための時間配分，機器を用いながらの実技に関する安全面の確保等，授業者である教員自身の授業マネジメント力が必要である．また，教員がタブレット操作に精通しているのはもちろん，タブレットやWi-Fi等の機器トラブルが生じた際の対処方法も把握しておく必要がある．本授業では，授業開講前と毎授業前後にTAの学生とタブレット端末の使用に際して打ち合わせ及び反省を毎回行ったため，大きな時間ロスや安全面の確保について問題はなかった．

さらに，授業映像の編集作業は，一定に時間を要するため，教員側の負担はある程度存在する．本授業では，授業後，毎回約2時間程度かけてe-learningシステム（WebClass）へのアップを行い視聴できるようにした．授業毎に行っているため，慣れてくると映像編集はスムーズになり，作業時間等は短縮されていった．しかし，その他にも成績評価を含めた学習ノートやワークシートの添削（毎時1時間，のべ16時間）等も必要となるため，授業の質を落とすことなく教員の負担が大きくならないよう工夫が必要である．

## 5．研究の限界

本研究の成果は，国立の体育系大学の「選択科目」である「ダンス」授業の3，4年生を対象にした単一事例から得た知見である．学生は，専門とする種目は異なるものの，ある一定の運動能力は持ち合わせており，比較的学習意欲の高い，教員免許取得希望者が多く選択をした授業であった．従って，他の学部や他学年の学生を対象とした授業，また「必修科目」等で学生間の授業へのモチベーションが異なる場合には，結果が異なる可能性も考えられる．また，統制群を設けていないため，本研究における授業の成果がICTを活用したことの直接的成果であったかどうかについて確信を持って結論することはできない．今後，それらの点を考慮に入れた実験的な検証が必要である．

## 注

1)「アクティブ・ラーニングの一般的特徴」は，Bonwell & Eison（1991）が”Active Learning: Creating Excitement in the Classroom”で述べた5つの定義に，溝上慎一の著書『アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換(2014)』の中で述べられている「認知プロセスの外化」を追記して，松下佳代(2015)が著書の中で示している．この6つの特徴は，高等教育のアクティブ・ラーニングとして現在一般的に参照されるものである．

2) 4名の教諭のインタビューよりこの場合の「動きの多様化」は，視線の工夫や体の使い方，動きの質感の変化，空間の変化等を指しており，村田(2011，2012)が示す「4つのくずし」との共通点が多くみられる．

## 文献

福岡体育研究所(2013)「体育的学力」を育む授業づくり－小･中･高12年間を見通した授業モデル－．平成22・23・24年度福岡県体育研究所　調査研究報告書，9.

秀島邦治・堤公一・福本敏雄(2013)体育授業における生徒の意欲や技能を高める教師の相互作用行動に関する考察－中学校2年跳び箱運動(集団演技づくり)の授業分析を通して－．佐賀大学教育実践研究，30：183-192.

賀川昌明(2006)小学校体育授業におけるマット運動学習支援ソフト使用に対する児童の評価－授業に対する態度変容類型からみた認識の違い－．体育科教育学研究，22（1）：15-23.

賀川昌明・梶貴一朗(2013) iPad利用による動画フィードバックの方法とその効果：中学校野球部員を対象にした心理サポートにおける実践事例．鳴門教育大学情報教育ジャーナル，10：1-8.

栫ちか子(2014)「ダンス」の学習におけるタブレット端末活用の効果－体育専攻大学生を対象とした実践事例－．鹿屋体育大学スポーツ情報センター広報，5：7-13.

栫ちか子・小松恵理子(2015)現職教員のダンス授業実践に影響を及ぼす要因に関する検討－鹿児島県におけるダンス実技研修会のアンケートより－．九州体育･スポーツ学研究, 30（1）：35-41.

金子明友(1987)運動観察のモルフォロギー．筑波大学体育科学系紀要，10：113-124.

鹿屋体育大学スポーツ情報センター（2014)体育・スポーツにおけるタブレット端末の活用．5：4-33.

鹿屋体育大学スポーツ情報センター（2016)体育大学におけるICTを活用した教育・研究の展開．6：4-28.

鹿屋体育大学スポーツ情報センター（2017)体育大学におけるICTを活用した教育・研究の展開(2)．7：4-45.

片岡牧子(1997)視覚情報と運動感覚情報がダンス創作技能に

与える学習効果に関する一考察．日本体育学会大会号，48：605.
岸一弘(2008)小学校の体育授業で運動を教えるための能力－教員養成課程での実践的指導力の育成について－．共愛学園前橋国際大学論集，8：209-218.
木山慶子(2014)教員養成におけるダンスの授業改善－学生による授業評価とダンスを苦手とする学生の変容から－．群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編，49：93-103.
国立教育政策研究所(2015)中等教育・保健体育の教員養成の資質・能力一覧．教員養成等の改善に関する調査研究(全体版)報告書，55-60.
松本千代栄(1992)第 5 章ダンス学習の発表と鑑賞．(松田岩男総監修，『ダンスの教育学 3 創作ダンスの基本的段階』)．徳間書店，pp.183.
松本奈緒・三浦武・海賀孝明・柴田傑・齋藤龍一・桂博章・玉本英夫(2011)秋田の盆踊りの学習におけるデジタルコンテンツを用いた学習支援の効果と限界－モーションキャプチャ技術を応用した学習支援装置作成の試み－．舞踊學，34：1-10.
松本奈緒(2017)中学校段階のリズムダンスの授業における学習者の形成概念－カードとキネクトによる動きの提示とタブレット型 PC による動きの確認を工夫して－．秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門，72：111-122.
松本富子(1992)第 5 章ダンス学習の発表と鑑賞．第2節鑑賞と評価．(松田岩男総監修，『ダンスの教育学 3 創作ダンスの基本的段階』)．徳間書店，pp.186-187.
松本富子・高橋和子・茅野理子・細川江利子・佐分利育代・廣兼志保・畑野裕子(1994)現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討－大学時履修経験が与える影響について－．舞踊学研究，16：12-23.
松坂仁美(2014)体育における ICT 活用に関する一考察－教職志望の学生を対象とした iPad3活用事例の検討．美作大学・美作大学短期大学部紀要，59：97-104.
松下佳代(2015)序章 ディープ・アクティブラーニングへの誘い．(松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編，『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』)，勁草書房，pp.1-3.
Meinel, K 著．金子明友訳(1981)スポーツ運動学，大修館書店，pp.140-143.
三浦弓杖(1984)舞踊教師は体育教師か．体育の科学，34：37.
宮本乙女(2005)創作ダンスの学習における学習者によるパフォーマンス評価の研究．お茶の水女子大学附属中学校研究紀要，34：65-86.
宮本乙女・中村恭子(2015)体育系大学における中学校ダンス必修化に対応したダンス指導法授業の検討：ダンス指導法授業を受講した学生の意識の変容を通して－．日本女子体育大学紀要，45：141-153.
宮本乙女・松山善弘・松澤慶信・小山佳予子・坂本秀子・八木ありさ・髙野美和子・岩淵多喜子(2017)中学校・高等学校における，ダンス指導に有用な映像コンテンツの開発．日本女子体育大学紀要，47：101-113.
水島宏一(2015)器械運動のデジタル資料の検討－アプリ開発のため－．スポーツ教育学研究，35（1）：1 - 13.
文部科学省(2006)今後の教員養成・免許制度の在り方について．中央教育審議会答申．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm
文部科学省(2008)中学校学習指導要領解説　保健体育編.
文部科学省(2010)教育の情報化に関する手引き．http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm
文部科学省(2011)教育の情報化ビジョン～ 21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～．http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/__icsFiles/afieldfile/2011/04/28/1305484_01_1.pdf
文部科学省(2012)教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について．中央教育審議会答申．http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf
文部科学省(2016)教育の情報化加速化プラン － ICT を活用した「次世代の学校・地域」の創生－．http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/07/__icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375100_02_1.pdf
文部省(1989a)中学校学習指導要領．大蔵省印刷局：東京.
文部省(1989b)高等学校学習指導要領解説　保健体育編．東山書房：京都.
文部省(1999a)小学校学習指導要領解説　体育編．東山書房：京都.
文部省(1999b)中学校学習指導要領解説　保健体育編．東山書房：京都.
文部省(1999c)高等学校学習指導要領解説　保健体育編．東山書房：京都.
村田芳子(2008)表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは？－学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ－．体育科教育，56（3）：14-18
村田芳子(2009)表現運動・ダンスの特性とその指導．女子体育，51（7.8）：8-9.
村田芳子(2011)「4つのくずし」に挑戦．新学習指導要領対応表現運動・表現の最新指導法，小学館，pp.12.
村田芳子(2012)自由に踊るときのヒント「4つのくずし」に挑戦．新学習指導要領対応　表現運動・リズムダンスの最新指導法，小学館，pp.13.
中村剛(2010)体育教師の養成機関における運動観察力の養成方法論の構築．総合研究機構研究プロジェクト研究成果報告書平成21年度，http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php?id=KP21A09-10
中野裕史・田村孝洋(2017) ICT を活用した授業形態が器械運動の学習成果に及ぼす影響．中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要，49：91-95.
日本教育大学協会(2004)「教員養成の『モデル・コア・カリキュラム』の検討－『教員養成コア科目群』を基軸にしたカリキュラムづくりの提案－」．『会報』第88号，pp.10
岡本敦・青山有理・田口由香(2015)保健体育科教育法(体操・器械運動)における iPad の活用．東海学園大学教育研究紀要，1：3-12.
沖本由佳里(2016)思考力・判断力・表現力の育成を目指した保健体育科の授業開発－ダンス領域における「よい動き」の可視化と自己表現力の向上を目指して－．滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要，58：78-83.
大庭千世子(2000)高等学校のダンス ダンスの発表会 -- 無理なくダンス発表会にとりくむために．女子体育，42(2)：45-48.
大島浩幸・山田憲政(2010)運動技術レベルと運動観察能力の関連．スポーツ心理学研究，37（2）：65-74.
佐藤徹(2001)運動観察のトレーニングに関する基礎的研究．スポーツ運動学研究，14:15-25.
佐藤豊(2014)単元構造図を活用して指導計画を作成する．中学保健体育科ニュース，1：4-6.
佐藤豊・栫ちか子(2015)単元構造図，模擬授業，映像視聴の連

続体験による体育科教員養成授業モデルの検討－鹿屋体育大学における2013年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察から－．鹿屋体育大学学術研究紀要，51：11-24.
佐藤豊・栫ちか子(2016)鹿屋体育大学における2014年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察－体験学習モデルに基づくアクティブ・ラーニング型授業における実践的指導力育成システムの構築に向けて－．鹿屋体育大学学術研究紀要，52：35-67.
白石豊(1990)体育科教育における運動観察能力の育成に関する研究(その1)．福島大学教育実践研究紀要，18：125-134.
総務省(2017)はじめに－教育 ICT なぜ進める？どう進める？－．クラウドで教育をより良く　教育 ICT ガイドブック，1：3-4.
高橋和子(2008)なぜいま「ダンス必修化」なのか？．体育科教育，56（3）：20-23.
髙橋仁大・田中裕己(2014)スポーツの実践的指導力養成のためのコーチング実習の試み．スポーツ情報センター広報，5：29-33.
髙村秀史(2016)スポーツ授業における ICT を活用した学習・教育支援．日本福祉大学全学教育センター紀要，4:45-51.
谷本英彰(2016)ダンス授業における創作活動がジェネリック・スキルに及ぼす効果：チームワーク能力に着目して．大阪産業大学人間環境論集，15:21-33.
寺山由美(2004)ダンス教育における自己実現について．体育・スポーツ哲学研究，26（1）：13-23.
寺山由美(2005)舞踊教育における学習内容の検討－特に小学校における「表現」に着目して－．（社）日本女子体育連盟学術研究，22：29-38.
寺山由美・細川江利子(2011)表現・創作ダンスの学習における「即興表現」の指導とその捉え方－実践を続けてきた4人の教諭に着目して－．日本女子体育連盟学術研究，27：21-38.
栃木県教育委員会(2011a)新学習指導要領に基づく評価規準設定のための参考資料(小学校編)，56.
栃木県教育委員会(2011b)新学習指導要領に基づく評価規準設定のための参考資料(中学校編)，49.
山地弘起(2014)アクティブ・ラーニングとはなにか．大学教育と情報，146：2-7.
山崎朱音・村田芳子・朴京眞(2014)創作ダンスの指導における指導言語の意味と動きをみる観点：教材「新聞紙を使った表現」を対象に．体育学研究，59：203-226.
余語政夫(2011)体育授業における技能評価のための質的観点について－小学校4年生の実践事例から－．愛知教育大学保健体育講座研究紀要，36：47-49.

（2017年６月13日受付
2017年11月５日受理）

## 英文抄録の和訳

現行の学習指導要領では中学校第１学年及び第２学年において，「ダンス」を含むすべての領域を履修することとなり，体育系大学の「ダンス」の授業においては，保健体育科教員免許の取得を希望する学生が多く履修している．教員養成を担う大学の授業では，「実践的指導力」の養成が求められているが，ダンス授業においても，示範等に必要なダンスの運動技能向上のみならず，技能評価力を育成することは必須の課題である．

本研究では，体育系大学のダンスの授業において，ICT を活用したダンス映像視聴・評価活動を取り入れた授業を行い，その実践と学習効果の可能性について検討することを目的とした．授業では，タブレット端末（iPad）を用いて動きを撮影し，撮影された映像を視聴しながら自分や仲間の動きについて省察を行った．また，授業映像を学内の e-learning システムにアップし，授業ノートの作成を通して授業の振り返りを行った．その結果，ICT を活用したダンス映像視聴・評価活動を含む授業実践は，運動技能の改善や技能評価の理解に有効であり，授業の振り返りにおいても，授業内及び授業終了後においての指導内容の確認・活用，合意形成的思考の育成に貢献しうることが示唆された．また，ペアやグループでの課題解決型学習を積極的に取り入れることが，主体的態度や協力・公正的姿勢を育む上で重要であると考えられた．